

使徒の働き17章16-34節 「知られていない神」

1A 偶像礼拝に対する熱情 16-21

1B 哲学者との論議 16-18

2B 新しい教え 19-21

2A 天地を造られた主 22-34

1B 宗教心の熱さ 22

2B 知られない神の正体 23-28

1C エピメニデスの言葉 23

2C 創造主 24-25

3C 造られた人間 26

4C 近くにおられる神 27-28

3B 悔い改めへの招き 29-31

1C 偶像礼拝からの立ち返り 29

2C 見過ごされた神 30

3C 裁きに確証を与えた復活 31

3A パウロのことばへの応答 32-34

1B 嘲りと延期 32-33

2B 信仰に入った者たち 34

本文

使徒の働き 17 章を開いてください。私たちは午前礼拝で、17 章の前半部分、1 節から 15 節までを見てきました。その続きを見て行きたいと思います。16 節からです。前半において、パウロは他の町々と同じように、ユダヤ人の会堂で、聖書から論じ、イエスこそが約束されたキリストなのだと宣べ伝えました。聖書を知っているからこそ、イエスとその律法と預言者の成就そのものなのだと論じることが出来ました。けれども、アテネは違います。全く聖書の知識のない人々、神についてのことも、まるで違う神々を拝んでいる人々に対して、彼らの土俵に立ち、それでもイエスの御名を宣べ伝えるパウロの姿を見ます。同じように論じていくのですが、既に聖書を知っているユダヤ人あるいは異邦人の神の敬う人々と、これらの異邦人とは、まるで異なる方法で伝えてきます。おそらく、私たち日本人には、このアテネでのパウロの説教はとても身近なのではないでしょうか？日本の方々も、基本的な聖書の知識を持ち合わせておらず、けれども、古来からの神々を持っているからです。

同じ福音宣教なのですが、聞く相手によってまるで違います。パウロはこのことを、コリント人への手紙第一でこのように述べました。「1 コリ 9:19-22 私はだれに対しても自由ですが、より多く

の人を獲得するために、すべての人の奴隷になりました。20 ユダヤ人にはユダヤ人のようになりました。ユダヤ人を獲得するためです。律法の下にある人たちには——私自身は律法の下にはいませんが——律法の下にある者のようになりました。律法の下にある人たちを獲得するためです。21 律法を持たない人たちには——私自身は神の律法を持たない者ではなく、キリストの律法を守る者ですが——律法を持たない者のようになりました。律法を持たない人たちを獲得するためです。22 弱い人たちには、弱い者になりました。弱い人たちを獲得するためです。すべての人に、すべてのものとなりました。何とかして、何人かでも救うためです。」すべての人たちに福音によって救われてほしいと願っていたので、すべての人たちに仕える者となったと言います。

私たちはとかく、世の愛を持ってはいけなく、世に対して無関心あるいは敵対的にさえなってしまう。けれども、神に対抗する世は愛してはいけませんが、その中に生きている人々を神はこよなく愛され、そのために御子を与えてくださいました。ですから、世に生きている人々のようになり、そこでキリストを示す必要があります。「それは、間違いだ！そこには神がない！」としたら、それは誤っています。すべてを造られた神は、神を知らない人々の中にもおられるのです。その神のおられることを、私たちキリスト者は探し求め、イエス様を紹介する必要があります。

1A 偶像礼拝に対する熱情 16-21

1B 哲学者との論議 16-18

¹⁶ さて、パウロはアテネで二人を待っていたが、町が偶像でいっぱいなのを見て、心に憤りを覚えた。

パウロがアテネに来たのは意図的ではありませんでした。ベレアにおいて、命が狙われていたので、なんとかシラスとテモテは踏みとどまっていたものの、彼だけがアテネに来たのです。そこで待っていたのです。

私たちがギリシアに旅行に行った時、ベレアからバスで陸路でアテネに向かいましたが、7 時間でしょうか、8 時間でしょうかかかったので、ほんとへとへとになってしまいました。マケドニアではなく、アカイアという地方で、今のギリシアの南部の地域です。ここは今、ギリシアの首都でありませんが、当時、ギリシア世界の中心的な都市でした。西洋文明の発祥地とも言われています。民主主義がここから生まれ、西洋思想を形作るギリシア哲学もここから生まれます。そして日本では古事記にある神々の話が神話としてありますが、ギリシアには、「オリンピック」の言葉の由来である、「オリンポス山」があり、そこから、オリュポス十二神という、神々が出て来たと言われていて、ギリシア神話があります。ゼウス神が多くの神々の中の主神です。十二神の中のアテーナーという女神から、アテネの町の名が始まりました。

アテネに行けば、その首都の中心がパルテノン神殿であることは一目瞭然です。そこに、アテー

ナーが祀られていました。どこに行っても、中心にそびえるアテネのアクロポリス(城砦)の上に建てられているパルテノン神殿の遺跡を眺めることができます。しかし、パウロがここに来た時には既に、その全盛期は終わっていました。最も栄えたのは、紀元前五世紀頃です。ローマ時代には、その威光は過ぎ去っていましたが、それでも、哲学や芸術、文学の中心的役割は担っていました。

パウロが、偶像がいっぱいなを見て、心に憤りを覚えたとあります。私がキリスト者になったばかりの時は、神社仏閣を見て、至る所に偶像があるとして心に憤りを抱いたものですが、海外に旅行して、日本はまだまだ、大したことがないと分かりました。エジプトに行ったら、エジプト神話に基づく偶像がわんさとあります。聖書を見たら、出エジプト記で十の災いが下りましたが、その対象はみなエジプト人が神々として拝んでいたものです。そして、ギリシアとローマの世界では、石ころを蹴ったら、偶像にぶち当たるぐらい、どこもかしこも偶像だらけでした。愛の神、戦争の神、怒りの神、嫉妬の神、ともかく何でも神にして、いけにえを捧げたり、香を焚いたりしていました。「アテネでは、人間を見つけるよりも偶像を見つけるほうが容易である」とまで風刺されていました。

しかし、ギリシアは「知」の発祥地です。哲学や文学が発達していました。パウロはそんなことを考えながら、ローマ 1 章後半を書いたのでしょう。「1:21-23 彼らは神を知っていながら、神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その鈍い心は暗くなったのです。22 彼らは、自分たちは知者であると主張しながら愚かになり、23 朽ちない神の栄光を、朽ちる人間や、鳥、獣、這うものに似たかたちと替えてしまいました。」知者であると言いながら、被造物を見れば明らかな創造主の存在を認めず、思いを暗くして、神の栄光を偶像に取り替えてしまったと言っています。

パウロは心に憤りを抱きましたが、次で見るとおり、論じ合うことによってその思いを消化しました。つまり、その人々も神に愛されており、神によって救われるべき人々だからです。神に与えられた熱情だったのですが、それゆえ、神が、人々が悔い改めて救われることを願っておられる、救霊の思いに駆られたのです。

¹⁷ それでパウロは、会堂ではユダヤ人たちや神を敬う人たちと論じ、広場ではそこに居合わせた人たちと毎日論じ合った。

ユダヤ人会堂にも行きましたが、広場、アゴラでも論じ合いました。今も遺跡が残っていて、パルテノン神殿の下にあり、その間に、次に出てくるアレオパゴスがあります。アレオパゴスから見ると、仰ぎ見てパルテノン神殿があつて、反対側を見下ろすとアゴラがあります。

¹⁸ エピクロス派とストア派の哲学者たちも何人か、パウロと議論していたが、ある者たちは「このおしゃべりは、何が言いたいのか」と言い、ほかの者たちは「彼は他国の神々の宣伝者のようだ」と

言った。パウロが、イエスと復活を宣べ伝えていたからである。

支配的であった哲学の二派です。エピクロス派とストア派です。エピクロス派は、快樂主義とも言われますが、私たちの考えるような肉体の快樂のことでは必ずしもありません。快樂とは、欲望や、苦痛や死の恐怖から解放されている平穩な状態なのだそうです。神々はいるかもしれないけれども、人間の生活には一切かわりないという考えで、死んだら終わりとなします。ストア派は、禁欲主義とも訳されて、英語で「ストイック」というと禁欲的などという意味で使われます。快樂や欲求の衝動に打ち勝ち、理性の与える正しい命令に従って生きよ、とするものでした。財産や地位は人為的に作られたものでそこには価値がない。自然や宇宙を価値あるものとみなし、そこにある法則に従えというものです。その世界を定める論理を「ロゴス」と呼んでいました。私たちの知っているロゴスは、神が肉体を取られた方、イエス様ご自身でした。けれども当時のロゴスは、ストア派の使っている意味でのロゴスでした。そして彼らは、そういったロゴスが自然にも自分にもあって、どこにでもロゴスがあるとしました。汎神論、すなわちすべてに神々があるとしましたのです。死後の世界については、あるが意識はなくなると考えていました。

そういったことから、パウロが言っていることは、なんだか訳のわからない話だったのです。「このおしゃべり」と言っていますが、あちこちから教えをつまみ食いをして、それを自分のものであるかのように語っている、安物教師のような意味なのだそうです。そして、イエスと復活を宣べ伝えていたのは、死後の世界がない、あるいはあっても、意識がないとしていたのですから、何を言っているのか？という感じです。さらに、イエスという名を出しているのです、なんだか外国の神のようだぞ、と思っていました。なんか、無宗教だと言っている日本人たちも、似た反応をしますね。

2B 新しい教え 19-21

けれども、次が日本人と大きく違います。



(アレオパゴスから見たパルテノン神殿)



(アレオパゴスから見おろすアゴラ)

¹⁹ そこで彼らは、パウロをアレオパゴスに連れて行き、こう言った。「あなたが語っているその新しい教えがどんなものか、知ることができるでしょうか。²⁰ 私たちには耳慣れないことを聞かせてくださるので、それがいったいどんなことなのか、知りたいのです。」²¹ アテネ人も、そこに滞在する他国人もみな、何か新しいことを話したり聞いたりすることだけで、日を過ごしていた。

アテネの人たちは、真新しい考えに非常に興味を持ちました。そうしたことを聞きながら、一日を過ごしていたとあります。ずいぶんと贅沢だなと思いますね。哲学に詳しいある牧師さんが、「哲学というのは、本質は遊びだ」と言っていました。暇つぶしのような遊びだと言っていたのが印象的です。ここに出て来る様子と似ています。

ところで、アレオパゴスは、場所の名前であると同時に、「評議会」という意味も持ちます。かつては評議会として、アテネの議員たち議会だったのですが、それは紀元前五世紀には、多くの権限が剥奪されて民主政となっていました。ただ評議会そのものは、ローマ時代にも残っていました。ここにパウロが連れて来られます。

2A 天地を造られた主 22-34

パウロは、彼らの意図は何であれ、語る機会が与えられたのですから、情熱をもって、偶像からまことの神に立ち返るよう説き始めます。

1B 宗教心の熱さ 22

²² パウロは、アレオパゴスの中央に立って言った。「アテネの人たち。あなたがたは、あらゆる点で宗教心にあつい方々だと、私は見ております。

パウロは、心の憤りをそのままぶちまけることはしていません。むしろ、彼らとの接点を探しました。それは、偽りの神々だけけれども、それでも「宗教心にあつい方々」と言っています。私たちは、真理に妥協せずに、けれども、彼らに主のことばを聞いてもらうための、架け橋になるような言葉を持つべきですね。彼らの土俵に乗り、そこからまことの神に目を向けてもらおうとしています。イエス様も、それを行われていました。サマリアの女が来た時に、彼女は井戸の水を汲みに来たのですが、「水を飲ませてください」と話しかけました。

2B 知られない神の正体 23-28

1C エピメニデスの言葉 23

²³ 道を通りながら、あなたがたの拝むものをよく見ているうちに、『知られていない神に』と刻まれた祭壇があるのを見つけたからです。そこで、あなたがたが知らずに拝んでいるもの、それを教えましょう。

この「知られていない神」というのは、紀元前 600 年辺りにいたギリシアの賢人と呼ばれた詩人であり、預言者である、エピメニデスがいました。後でパウロが、「私たちは神の中に生き、動き、存在している」と言う言葉を引用しますが、これはエピメニデスの言葉です。テトスへの手紙 1 章 12 節で、「クレタ人はいつも嘘つき、悪い獣、怠け者の大食漢」とパウロは言っていますが、これもエピメニデスの言葉です。彼にまつわる話があります。

当時、アテネで疫病が発生しました。市民の 3 分の 1 が死に、全滅してしまうのではないかと思われました。数か月、続きました。エボラのような、出血し、もたえ苦しむ類のものです。彼らは、自分たちの偶像に叫び求めました。生贄を捧げ、体に傷をつけました。助けてくださいと叫んでも、何も起こりませんでした。そこでエピメニデスが夢を見ました、「次の朝、羊の群れがいる。群れが行くところに、立ち止まる場所まで付いていきなさい。立ち止まったところで、祭壇を築き、羊を屠りなさい。疫病は去って行く。」果たして夢の通りになり、言われた通り、羊が立ち止まったところでいけにえを捧げました。疫病が二日でやんだのです。これを、「知られていない神」と呼んだのです。どの神か分からなかったのです。それでパウロが、「あなたがたが知らずに拝んでいるもの、それを教えましょう。」と言いました。ストア派も、エピクロス派も、この神の力を既に知っていたのです。

2C 創造主 24-25

²⁴ この世界とそこにあるすべてのものをお造りになった神は、天地の主ですから、手で造られた宮にお住みにはなりません。

そのような力ある神は、世界を創造された神であると宣言します。ギリシア人は多神教ですから、これは大きな宣言です。そして次に、「手で造られた宮にお住みにはなりません」と宣言しています。いろいろな宮があり、その最大のものがパルテノン神殿です。そこに収められるような方ではないということです。ソロモンが神殿を建てた後に祈りましたね、「I 列王 8:27 それにしても、神は、はたして地の上に住まわれるでしょうか。実に、天も、天の天も、あなたをお入れすることはできません。まして私が建てたこの宮など、なおさらのことです。」ユダヤ人でさえ、ステパノが神殿そのものを礼拝してしまっていることを明らかにしました。まるでそこに神が収められているかのようにみなしてしまったのです。

²⁵ また、何か足りないかのように、人の手によって仕えられる必要もありません。神ご自身がすべての人に、いのちと息と万物を与えておられるのですから。

助けを必要としている神は一体何なのでしょう？神は、「わたしはある」と宣言されて、誰の助けも必要とせず、ご自分で存在することができます。けれども偶像は、いつも人の助けを必要とします。イザヤ書に、バビロンが滅ぼされて、偶像を運びながら逃げている姿を皮肉っています。「46:1-2 ベルはひざまずき、ネボはかがむ。彼らの像は獣と家畜に載せられる。あなたがたの荷物は、疲れた動物の重荷となって運ばれる。彼らはともにかがみ、ひざまずく。重荷を解くこともできず、自分自身も捕らわれの身となって行く。」しかし、キリスト者であっても、「自分が頑張らなければ、神が働かない。」かの勢いで、神に仕えようとする人たちがいます。その神って、本当にまことの神なのか？調べて見る必要がありますね。神は私たちの助けなど一切必要としません。私たちが仕えるのは、神が命じておられるからという理由であり、神の恵みに応答しているからです。

そして、「すべての人に、いのちと息と万物を与えておられる」という方です。今、たった今、その息について、自分でどういかなるのでしょうか？いいえ、神などいない、自分を信じているから、という方は、では、自分の力で息をしてください。酸素も創造して、毎回、意識して息するようにしてください。あり得ませんね。これだけでも、いのちを与える存在、神がおられることが証しされています。

3C 造られた人間 26

²⁶ 神は、一人の人からあらゆる民を造り出して、地の全面に住ませ、それぞれに決められた時代と、住まいの境をお定めになりました。

今度は、人間についてパウロが語ります。それぞれの民が、その民が生み出された神話を持っていますね。日本であれば、日本書紀にある神話です。ギリシア神話にあり、それゆえアテネ人たちは特別な民だと思っていました。けれども、すべての民が息をするし、同じ人間です。このことに応えていません。科学的にも、すべての人が初めは同じところから、同じ人から出て来たことを指し示しています。それは、聖書に啓示されている真理なのです。神がアダムを造られ、そこからす

べての人たちがいます。そして、ノアの時代のその家族を除き滅ぼされましたが、ノアの家族から民族、言葉が分かれ出ました。そして全地に住んでいます、決められた時代に行き、また住まいの境も定められています。

私たちは、一つの歴史を見ると、それが聖書にあるイスラエルの歴史に限らず、そこに不思議な摂理を見ますね。それは神がそうされているからです。英語では、歴史は History ですが、History(この方の物語)と言い換えたりします。

4C 近くにおられる神 27-28

²⁷ それは、神を求めさせるためです。もし人が手探りで求めることがあれば、神を見出すこともあるでしょう。確かに、神は私たち一人ひとりから遠く離れてはおられません。

ここで、神が人の近くにおられることを宣べています。まだ一度も聖書を読んだことがない人、イエス・キリストの名を聞いたことのない人でも、神がおられるということをすぐに気づくように、神がしてくださっています。私もこのことを知って、信仰に至りました。遠くに神がいるものだと思っていたら、生活のあらゆる面で神がおられることを知ったのです。父親もそのことを言っていました。私が、神が近くにおられることを話したことがあったようです。そのことが、かなり求道している時に助けになったようです。エピクロス派の人たちは、どこか遠くにいるかもしれない神について話していましたが、それを否定しています。

²⁸ 『私たちは神の中に生き、動き、存在している』のです。あなたがたのうちのある詩人たちも、『私たちもまた、その子孫である』と言ったとおりです。

これが、彼らの詩人エピメニデスの言葉です。そして、キリキアのアラトユスが、「私たちもまた、その子孫である」と言いました。これは、別の文脈で二人とも語っていたのですが、けれども、そこにまことの神の真理を指し示す言葉でもあったのです。私たちは、仏教には何も真理がないとか簡単に言うことができるでしょう。けれども、そこにまことの神を指し示す、何かのヒントを神ご自身が置いているかもしれません。

3B 悔い改めへの招き 29-31

神について話し、人に付いて話し、神と人との関わりについて話した後で、彼は悔い改めを呼びかけます。

1C 偶像礼拝からの立ち返り 29

²⁹ そのように私たちは神の子孫ですから、神である方を金や銀や石、人間の技術や考えで造ったものと同じであると、考えるべきではありません。

これは論理的にそのとおりです。神の子孫である私たちが、これが神だとして、人間で作った神と同じだとすることはおかしいのです。イザヤ書 44 章に、偶像を造る者たちの空しさが書いていますが、木の半分で薪にして、暖かいと言って、その同じ木の半分で、像を造って、神よと叫ぶ。これはどう考えてもおかしいです。

2C 見過ごされた神 30

³⁰ 神はそのような無知の時代を見過ごしておられましたが、今はどこでも、すべての人に悔い改めを命じておられます。

神は、ご自分がおられることをはっきりさせる時を定めておられました。それがイエスが来られ、死んでよみがえる時です。ローマ 3 章にも、パウロはこう言っています。「神はこの方を、信仰によって受けるべき、血による宥めのささげ物として公に示されました。ご自分の義を明らかにされるためです。神は忍耐をもって、これまで犯されてきた罪を見逃してこられたのです。」神は寛容を持って見逃してこられましたが、今はその定めの時が来ました。キリストが現れたからです。

3C 裁きに確証を与えた復活 31

³¹ なぜなら、神は日を定めて、お立てになった一人の方により、義をもってこの世界をさばこうとしておられるからです。神はこの方を死者の中からよみがえらせて、その確証をすべての人にお与えになったのです。」

神は、一人の人、アダムによって人々を造られましたが、同じように一人の人によって、世界を正しくお裁きになることを決めておられます。イエス様です。「ヨハ 5:27-29 また父は、さばきを行う権威を子に与えてくださいました。子は人の子だからです。28 このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞く時が来るのです。29 そのとき、善を行った者はよみがえっていのちを受けるために、悪を行った者はよみがえってさばきを受けるために出て来ます。」

神が、一人一人をよみがえらせて、御子によって裁かれます。悔い改めて、この方を信じたか、そうでないかで裁かれます。そして、そのよみがえりの初穂としてイエス様がまずよみがえらえました。この方はもはや、ローマの僻地のイスラエルで死んだ人ではなく、神の御子として公に現れたのですから、すべての人が神に申し開きをして、神の裁きに服することになるのです。私たちはどうしても、圧倒的に神を知らない人々に囲まれている中で、イエスの御名による救いしか、この世界にはないのだと宣言することは、大胆であり、勇気が要ります。けれども、神が裁かれるのは、一人の人によってであり、それがイエス・キリストご自身なのです！

3A パウロのことばへの応答 32-34

1B 嘲りと延期 32-33

³² 死者の復活のことを聞くと、ある人たちはあざ笑ったが、ほかの人たちは「そのことについては、もう一度聞くことにしよう」と言った。³³ こうして、パウロは彼らの中から出て行った。

彼らは、創造主なる神、人の起源、神と人との関係まで聞いていましたが、悔い改めの招きを聞いたら、こういう反応になりました。アテネの人たちにとって、死んだら終わりというのが当たり前で、あったとしても意識がないと思っていました。ですから、肉体がよみがえって、おまけに自分のしたことに対して裁きがあるとなれば、いわゆる「ドン引き」なのです。

あざ笑うという反応がありました。そして、「そのことについては、もう一度聞くことにしよう」というものがありました。この二つの反応、よくありませんか？ ひどく反発するか、心でせせら笑っている人たちがいます。また、延期する人もいますね。「そのことは、また後にしておきます。」「都合がよくなった時に決めたいと思います。」ということです。後にパウロは、総督フェリクスに語りました。「使 24:25 しかし、パウロが正義と節制と来たるべきさばきについて論じたので、フェリクスは恐ろしくなり、「今は帰ってよい。折を見て、また呼ぶことにする」と言った。」

パウロはそのまま去って行きました。語ったことが重要で、その結果は神が責任を取ってくださるからです。しかし、この働きによって実は結ばれます。

2B 信仰に入った者たち 34

³⁴ ある人々は彼につき従い、信仰に入った。その中には、アレオパゴスの裁判官ディオヌシオ、ダマリスという名の女の人、そのほかの人たちもいた。

信仰に入った人たちがいるのです。この評議会の一員であった、ディオヌシオがいました。そして貴婦人の一人だったので、ダマリスという女の人もいました。そして他の何人かもいました。ただその後の使徒の働きでも、手紙の中にもアテネにおいて、教会が建てられていることは見受けることができません。どうなったのかは、新約聖書は明らかにしていません。

パウロは、自分の置かれているところで、精いっぱい、伝道しました。たった一人になって、決して理想ではない状態で、それでも論じて、悔い改め、イエスを信じるように説きました。アテネの人たちの土俵で語りました。神がそこにいるのだと語って。私たちも、恐れることなく、人々の間で、そこにおられる神を紹介していきましょう。